

# 学期レポート 2009 年秋学期

日本財団聴覚障害者海外奨学金事業  
第4期生 武田 太一

## オーロニ大学とは

留学最初の1年間は英語・アメリカ手話研修として、オーロニ大学にて学ぶことになっている。オーロニ大学はカリフォルニア州フリーモント市にあるコミュニティカレッジであり、学生数19,000人、教職員700人が在籍・在勤している。およそ30の国からの留学生を270人迎えており、自分と同じ時期に入学したろう・難聴の留学生は16人である。それぞれ日本、エジプト、ザンビア、ナイジェリアと様々な国から迎えているので国際交流にもなっている環境である。

オーロニ大学で開講しているクラスは多様であり、およそ180の学位もしくはプログラムを受講することが出来る。アメリカ手話、アメリカ手話通訳者養成コース及びろう・難聴学生プログラムも設置されているのがオーロニ大学の特徴であり、この大学に通ったことがある日本人留学生も数多い。

## オーロニ大学における秋学期クラス

秋学期は以下の4クラスを受講した。

- ・ ASL103 (5単位) アメリカ手話クラス レベル3
- ・ DEAF189A (3単位) 聴覚障害学生クラス 英語リーディング
- ・ ENG151B (4単位) 一般クラス 英語ライティング
- ・ DEAF161 (3単位) アメリカ手話クラス ろう文化

合計15単位である。留学生は12単位以上受講しなければならないため、どのクラスを受講するか迷ったが、

- ・ アメリカ手話を磨くためにASLクラスは是非受講したい
- ・ ろう学生と対等なコミュニケーションが出来る教授のクラスを受講したい
- ・ 大学院進学に向けての英語クラスを受講する必要がある

などの理由により、上記の3クラスは確定したが、それでも時間的に余裕があるのでろう文化クラスを受講した。(当初はろう教育クラスを受講する予定であったが、人数不足により開講中止となり、ろう文化に変えた。)それぞれのクラスの様子は以下の通りである。

## アメリカ手話 レベル3

渡米前の国内研修において、アメリカ手話のマンツーマン指導を受けたり、日本ASL協会が開講するクラスに参加するなど進めてきたが、まだ自分の言いたいことや考えていることがアメリカ手話で思うように表意することができない上に、語彙も乏しい状況であった。オーロニ大学デフセンターのカウンセラーによると、秋学期が始まる時点での自分のアメリカ手話レベルは、102クラス(4段階評価でレベル2)に値するようである。しかし102クラスは他に受講するクラスと時間が重複しているため、アメリカ手話クラスの教授にお願いして1つ上の103クラスを受講させていただくことが出来た。

最初に教室に入ったときは、受講生のほとんどが手話を巧みに使っているという感慨を受けたため、果たしてこのクラスについていけるだろうかという戸惑いがあった。教授はろうの両親を持つコーダ(Children of Deaf Adult)の女性で、厳しくありながらも、心優しい先生であった。受講生は聞こえる受講生が20人、ろう受講生が5人というちょっと大所帯のクラスであったが、途中で辞める人もいたため、最終的には10人ぐらいになったのではないかと思う。クラスメイトに同じ日本人ろう受講生がいたので、分からないことなどは彼女に聞くことができ、何かと助かっていた。前述したように、生徒みんなが手話を堪能に使っていたため、自分が遅れているような感じがした。しかし、講義が進むにつれ、他の生徒たちの手話も拙い部分があるということが分かり、そんなに気負いする必要はないと実感した。

基本的に講義は教授が声なし手話で進めていくが、講義中に与えられる課題はスクリーンに英語で打っていくため、その英語が読めずついていけないこともあった。時折、英語の文章を読んで手話で表現する課題が課せられたが、何とか乗りきることができた。単なるアメリカ手話のクラスではなく、英語の意味を捉えた上で、アメリカ手話で表現するという大変さも学んだクラスであった。

## ろう学生クラス 英語リーディング

このクラスは一般クラス（メインストリーム）の英語クラスや、他の大学への編入するための英語準備クラスであり、ろう受講生を対象としている。教授は聞こえる人ではあるが、ろう受講生への指導 20 年以上も続けている手話が堪能な女性である。渡米前にこの教授から英語指導を受けており、日本とアメリカを隔てての遠隔指導および、教授自身が日本まで渡米して奨学生のために英語指導にあたっていた。ぜひとも彼女のクラスを受講したいと考えていたため、このリーディングクラスを受講することにした。

受講生たちはろう・難聴学生だけで集まっており、それぞれ育ってきた環境は異なる。ろう学校育ち（特にオーロニ大学の近くにあるフリーモントろう学校卒業生が多い）もいれば、インテグレーション（メインストリーム）育ちもいる。全員がアメリカ手話を使うので、教授も手話を使ってクラスを進めてきた。教授と受講生が直接コミュニケーションを取り合えることで、相互理解が深まるクラスであった。時々、受講生同士でグループを作り、ディスカッションすることがあり、アメリカ手話も英語も十分に追いついていない自分にとっては、苦難の業であった。しかし、アメリカのクラスにおいてはディスカッションや、クラス中の質疑応答など受講生の自発的な参加態度が求められる。ここはアメリカなんだ！と自分に言い聞かせて、乗り越えるしかなかった。これまで日本において受け身でクラスを受けてきたという参加態度は、ここアメリカでは通用しないので、自分から積極的になる必要があると感じさせられたクラスであった。

## 一般クラス 英語ライティング 151B

聴者の学生と一緒に受ける（メインストリーム）英語クラスである。大学院進学に備えてこのクラスを受講しておく必要があり、秋学期開始前に受けた英語テストの結果により、自分はインド人女性教授のクラスで受講することになった。厳しい先生ではあるが、丁寧に指導してくれる先生であったため好感が持てた。また、このクラスで留学して早々と手話通訳とパソコン速記（リアルタイムキャプション）を利用することになり、何もかもが初めての経験であり、最初の1～2ヶ月は慣れるのに苦労した。

このクラスではエッセイの書き方についてと、英文法について勉強した。エッセイは、日本の大学で言えばレポートにあたるものかもしれないが、書き方は大きく異なる。どのエッセイにおいても、導入→本文→結論という流れが基本的であり、さらに本文中の各段落の始めに主題文を入れる必要がある。最初はこのエッセイの書き方に慣れていないため、不合格ばかりもらっていた。しかし、エッセイを書き直して再提出することができたため、チューター（個人指導）を利用して何度も推敲しながら成績を少しずつ上げることができた。

通常の講義だけでなく個人プロジェクトもあり、生徒はそれぞれ自分の好みの雑誌を取り上げて、そこで使われている英語を分析するものであった。自分はこの個人プロジェクトを取り組む以前に、英文法に問題があったため、教授から特別に文法練習テキストをいただいた。それをこなしていくことで個人プロジェクトとなり、最終的にこのクラスの成績は満足のいくものではなかったが、また取りたいと思えるクラスであった。

## アメリカ手話クラス ろう文化

これまで普段の生活の中でろう者との関わり、講演会や勉強会などへの参加、様々な団体で役員としての活動を通して、日本のろう文化について触れてきた。アメリカでは「ろう文化」という講義があること、アメリカと日本でろう文化は異なるのかなど興味をそそられ、このクラスを受講することにした。例年、日本でも何度か講演経験のあるオーロニ大学教授がこのクラスを受け持っているのだが、この年は残念ながら1年間の休暇を取っていた。その代わりに、代理講師によってクラスが進められたのだが、この講師もまた良い方であった。ろう・難聴受講生が自分を含めて4人、その他は健聴であり、講師自身がろうであり手話を使うので手話通訳が配置されている。自分が留学生ということで分かりやすく説明をしてくれたり配慮してくれた。

性差別や人種差別と同じように聴覚差別 (Audism) という言葉があり、一般的な差別 (Discrimination) が日常生活の中で例えば音声情報が流れている中で手話通訳や文字通訳が配置されていない状況を指し、聴覚差別はろう者が手話もない聞こえる人の集まりの中で無理して過ごしている気持ちを指す。日本でも聞く話があるとせば、今まで聞いたこともない新鮮な話も聞いたので、楽しく過ごせたクラスであった。

クラスを通して強く思ったのは、アメリカでは手話を言語として認めているという点と、聴学生とろう学生が同等の情報を得るために手話通訳あるいはパソコン速記を配置することは法律で定められている点である。またクラス中に教授は受講生たちが何の妨げもなく勉強できる環境を提供する義務があり、受講生への注意だけでなく、手話通訳への指示なども含めることも感慨深かった。

## フリーモントでの生活

自分がアメリカで生活し始めたのは7月25日からである。日本なら蒸し暑い日々が続いているところだが、ここは乾燥した気候であり夏でも涼しく感じられ、快適に過ごすことが出来た。大学までの通学は、バス1本で事足りるのだが、買い物に出かける、何らかの行事に参加するなど車が必要になる時もあり、自家用車を購入した。車で行ける範囲に、日本の100円ショップや日本食スーパーがあるため、食生活に困ることはなかった。残念といえば、カップラーメンがあまりないことと、缶ジュース・コーヒーの自動販売機がないことである。

秋学期中はハロウィーンや感謝祭 (サンクスギビングデー) などアメリカならではの行事があり、ハロウィーンでは変装して街に出かけると、周囲の人々も思いのままに変装していて、アメリカの文化の面白さを体感した。感謝祭がある週は連休になることが多く、旅行に出かける人が多かった。自分はどこかに出かけることはなかったが、友人らを集めてそれぞれ食事を持ち寄って会話に花を咲かせるなど楽しんだ。